

名大医学部学友時報 2018 8

目次

1. 学友会評議会開催	 (2)	大野 欽司
2. 准教授就任	橋本 直純 (3)	村田 誠
3. 新病院長に聞く	後藤 秀実 (4)	7. プレスリリース
	近藤 泰三 (5)	8. クラス会だより 緑仁会
4. 会員寄稿	浜島 信之 (6)	9. 叙勲受章申告のお願い
	永井 美之 (7)	10. クラス会だより 晩成会
5. 人生山あり谷あり	井口 昭久 (8)	11. 学友大会ご案内
6. 第 30 回日本医学会総会 2019 中部	 (9)	12. クラブ活動報告 名古屋大学医学部ラグビー部
	堀田 知光	13. 編集後記
		 (16)
		 (11)
		 (13)
		 (14)
		 (14)
		 (16)

学友会評議会



学友会評議会 開催

7 月 7 日（土）医学部鶴友会館 2 階大会議室において、平成 30 年学友会評議会が 22 名の出席と 62 名の委任状を得て開催されました。はじめに、名古屋支部長の立松廣先生が開会の辞を述べられ、尾崎紀夫先生が議長、宇野岳人先生が副議長に選出されました。続いて、学友会会長の門松健治研究科長がご挨拶され、会長としての抱負を述べられました。

次に、この一年間にご逝去された 37 名の会員に対して黙祷が捧げられました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

その後、新しく評議員になられた、東三河支部の山本義樹先生（S43 卒）が紹介されました。

続いて議事に入りました。庶務部長の尾崎紀夫先生より会務報告が行われ、平成 29 年度の第 108 回学友大会について報告されました。また今年度の第 109 回学友大会について、名古屋掖済会病院の院長である河野弘先生を大会委員長とし、平成 30 年 10 月 6 日（土）名古屋観光ホテル 3 階那古の間にて開催されることが報告されました。記念講演として、国立研究開発法人科学技術振興機構理事長であり名古屋大学名誉教授である濱口道成先生による「科学技術で未来を描け」が行われることが報告されました。

昨年度の支部総会については、10 支部で開催され、

延べ 13 名の教授が出席されたことが報告されました。

次に、ご欠席されました会計部長の大野欽司先生に代わり事務局から平成 29 年度の収支決算を報告され、監事の柳務先生により監査が報告されました。平成 30 年度の予算についても承認されました。

名誉会員には退職された 3 名の教授、後藤秀実先生（消化器内科学）、神谷香一郎先生（環境医学研究所 心・血管学）、押田芳治先生（総合保健体育センター 健康スポーツ医学）が推薦、承認されました。さらに、大会委員長歴（70 歳以上）、支部長歴 10 年（70 歳以上）は該当者なしということで承認されました。

その後、学友会会長の門松健治先生より、名古屋大学医学部創基 150 周年記念事業についてのお話があり、具体的には名古屋大学医学部 150 年史、名古屋大学医学部年表、名古屋大学医学部ネクタイ・スカーフ、名古屋大学医学部キャンパスアイデンティティー、名古屋大学医学部創基 150 周年記念基金について議論されました。

最後に宇野岳人先生が閉会の辞を述べられ、本年度の評議会は終了しました。その後レストラン鶴友においての親睦会では、和やかな様子で親睦を深めていらっしゃいました。

（文責：石井 佐彩）



准教授就任

病態内科学講座 呼吸器内科学

はしもと なおずみ
橋本 直純

〈経歴〉

平成 6 年 3 月 名古屋大学医学部卒業
平成 6 年 4 月 社会保険中京病院研修医
平成 8 年 4 月 社会保険中京病院呼吸器内科専攻医
平成 10 年 4 月 名古屋大学大学院医学研究科内科系医学博士課程入学
平成 10 年 9 月 公立学校共済組合 東海中央病院呼吸器内科
平成 14 年 3 月 名古屋大学大学院医学研究科内科系医学博士課程修了 学位取得 (医学博士)
平成 14 年 4 月 アメリカミシガン大学病理学講座 postdoctoral fellow
平成 16 年 7 月 名古屋大学医学系 21 世紀 COE プログラム「神経疾患・腫瘍の統合分子医学の拠点形成」postdoctoral fellow
平成 19 年 7 月 名古屋大学医学部附属病院呼吸器内科助教
平成 25 年 4 月 名古屋大学医学部附属病院呼吸器内科病院講師
平成 27 年 5 月 名古屋大学医学部附属病院呼吸器内科講師
平成 30 年 5 月 名古屋大学大学院医学系研究科病態内科学講座呼吸器内科学准教授

〈業績〉

1. Hashimoto N, Ando A, Iwano S, Sakamoto K, Okachi S, et al.
Thin-section computed tomography-determined usual interstitial pneumonia pattern affects the decision-making process for resection in newly diagnosed lung cancer patients: a retrospective study.
BMC Pulm Med. 2018 18(1):2.
2. Hashimoto N, Iwano S, Kawaguchi K, Fukui T, Fukumoto K, et al.
Impact of thin-section computed tomography-determined combined pulmonary fibrosis and emphysema on outcomes among patients with resected lung cancer
Ann Thorac Surg. 2016 102 (2):440-447.
3. Kusunose M, Hashimoto N, Kimura M, Ogata R, Aoyama D, et al.
Direct regulation of TGF β -induced EMT by the protein phosphatase activity of unphosphorylated PTEN in lung cancer cells
Cancer Science 2015 106:1693-1704.
4. Hashimoto N, Phan SH, Imaizumi K, Matsuo M, Nakashima H, et al.
Endothelial-mesenchymal transition in bleomycin-induced pulmonary fibrosis
Am J Respir Cell Mol Biol. 2010 43: 161-172.
5. Hashimoto N, Jin H, Liu T, Chensue SW, Phan SH.
Bone marrow-derived progenitor cells in pulmonary fibrosis
J Clin Invest 2004 113:243-252.

学友会の皆様におかれましては、ご清栄のこととお慶び申し上げます。この度、平成 30 年 5 月 1 日付けをもちまして名古屋大学大学院医学系研究科病態内科学講座呼吸器内科学分野の准教授を拝命致しました。ここに謹んでご挨拶を申し上げます。

私は平成 6 年に名古屋大学医学部を卒業し、社会保険中京病院で初期研修を行ないました。平成 7 年に名古屋大学第一内科学講座 (齋藤英彦教授) に入局して、第六研究室 (呼吸器内科学分野) に所属しました。平成 8 年から呼吸器内科専攻医として中京病院で西脇敬祐先生、中西和夫先生、吉本鉄介先生のご指導のもと臨床の研鑽を積むことができました。当時は肺癌や急性肺傷害など呼吸器領域の疾患は治療に難渋していた時代で、その病態形成の理解を深めたいという強い気持ちを持つようになりました。

平成 10 年名古屋大学大学院医学系研究科に入学し、当時第一内科学講座第六研究室のチーフをされていた長谷川好規先生 (現呼吸器内科学教授) ならびに川部勤先生 (現名古屋大学医学系研究科医療技術学専攻教授) のもとで免疫学的観点からびまん性肺疾患の病態解明を行う研究テーマをいただきご指導賜りました。平成 14 年 3 月に齋藤先生、下方薫先生 (名古屋大学名誉教授)、長谷川先生、川部先生のご指導のもと、博士号を取得することができました。生命科学研究の先端技術と知識をご教授いただけただけでなく、課題解決の独創的仮説を着想する過程を学ぶことができ、感謝の念に堪えません。

平成 14 年 4 月、間質性肺炎における線維芽細胞 (fibroblasts) の生物学に造詣の深い米国ミシガン大学医学部病理学教室 Sem H. Phan 教授の研究室で研究する機会をいただきました。以前から間質性肺炎の線維芽細胞は多様な表現型を示すことが知られていましたが、GFP 陽性骨髄キメラマウスを作成して骨髄由来線維芽細胞が肺線維化病変に集簇することを明らかにし、報告することができました。

平成 16 年 7 月帰国後、名古屋大学呼吸器内科学教室 (下方薫教授) で長谷川先生、今泉和良先生 (現藤田保健衛生大学教授) のご指導のもと臨床の研鑽を積むとともに、名古屋大学医学系 21 世紀 COE プログラム「神経疾患・腫瘍の統合分子医学の拠点形成」postdoctoral fellow として研究の機会をいただきました。血管内皮細胞特異的レポーター蛋白発現マウスを作成して線維化病態形成において血管内皮細胞が筋線維芽細胞 (myofibroblasts) の細胞起源の一つであることを明らかにすることができました。

現在は、間質性肺炎と肺癌の分子病態の共通性に着目した基礎研究を進めるとともに、間質性肺炎や慢性閉塞性呼吸器疾患 (COPD) などの喫煙関連慢性呼吸器疾患が肺癌と併存することでもたらされる臨床的課題の解決に取り組んでいます。さらに、びまん性肺疾患に関する調査研究班の稀少難治性びまん性肺疾患克服への取り組みに参画しています。院内では、医学生教育、名古屋大学医学部附属病院内科専門研修プログラムの作成・運営、医療安全・外部機能評価の業務・準備にも携わる機会をいただいております。また 5 年間の医局長と 1 年間の病態内科学講座事務局長の職務を通して有意義な実務経験を積むことができたと考えます。

これまで多くの先生方からいただきましたご指導、ご支援に改めて感謝申し上げますとともに、診療、教育、研究を通じて社会に貢献するという意識をさらに高め、名古屋大学の発展に貢献していきたいと存じます。学友会の皆様には今後ともご指導、ご鞭撻のほどを宜しくお願い致します。

新院長
に
聞 く

名城病院

ごとう ひでみ
後藤 秀実

名城病院は名古屋市都心部の中核病院として15の診療科を有し、専門医たちによる高度な医療を提供しています。整形外科に設置された「脊椎・脊髄センター」は、側弯症のペプター手術を行う国内有数の治療拠点として、全国から訪れる患者さんの治療に当たっています。また、開院当初より幅広い心臓疾患に対応するために開設された「循環器センター」や、名古屋大学医学部附属病院から専門医を迎えた「消化器内科」など、内科・外科チームの連携による専門的な治療も実施しています。今後は国の施策でもある在宅医療の推進に向け、患者さんご家族の退院後の暮らしを見据えた支援をさらに強化していく方針です。地域の医療機関や関係機関のみならずとのネットワークづくりをはじめ、互いに情報を共有しながら、患者さんお一人ひとりの安心と生活を支える医療機関を目指していきます。

診療部門：消化器内科、呼吸器内科、腎・糖尿病内科、外科、循環器内科、胸部心血管外科、小児科・小児循環器科、整形外科・脊椎脊髄センター、皮膚科、泌尿器科、婦人科、眼科、脳神経外科、内分泌内科、神経内科、歯科口腔外科、麻酔科、放射線診断科

平成30年度に病院長に就任された後藤秀実先生にお話を伺いました。

——はじめに、病院長に就任されたお気持ちをお聞かせください。

今まで30年の教職では、研究、教育、臨床をモットーに活動してきましたが、名城病院に来て、研究からは遠ざかっています。それよりもここでは地域の人たちの健康を守るために貢献していくことが重要であると思っています。また経営面でも病院長は重要な役割を担いますが、それは単純に金銭面を考えると以外にも、この病院をどのような方向性に持っていくか決めることも、新病院長に課せられた役割になると思っています。赴任して2ヶ月たちましたが今はその方向性を探っている状況です。例えば託児所を作って女性医師が働きやすくするなど、いろいろな現実的な改革をして今の時代に合わせていくことが必要と考えています。

——名城病院の特徴を教えてください。

名城病院の特徴としては、1つ目は整形外科が非常に有名であること、2つ目は初代の院長である旧第二内科教授の青山進午先生の時より、内科から循環器内科が分かれていて当直などもすべて別で行うことが挙げられます。今後は消化器内科の医師を数人増やしましたので、

消化器内科、循環器内科、整形外科、呼吸器内科などを中心に運営していきたいと思っています。8月には内視鏡センターと健診センターが新しくオープンするので、特に内科は内視鏡診療と健診に力を入れていきたいです。そのような特徴のある病院を作らないと他の大病院には太刀打ちできないので、中規模の病院の中でも光るものを持った病院にしていきたいと考えています。

——今後の展望や抱負をお聞かせください。

先ほど言いましたように内視鏡センターと健診センターを新しくオープンするので、早期に疾患を見つけ早期に治療する方向を強くしたり、産科を廃止し、リハビリテーションを増室するなど新しい方向へ名城病院を向けていきたいと思っています。また、この地区には住人が少ないので、患者を集めるために、特化した診療科を作り、それを伸ばしていこうと思っています。さらに、日本の高齢化社会に合わせた病院作りも重要と思っています。

——卒後研修への取り組みをお聞かせください。

教育、指導が大事だと考え、月に1、2回程の抄読会を始め、その後上司と一緒に食事をしながらディスカッションをするなど、中堅の先生と研修医の先生が話し合う場を作るように努力しています。このように中堅の先生が指導できるシステム作りを今行っております。

——最後に学生へのメッセージをお願いします。

僕は最終講義でも話しましたがチャレンジ精神が重要だと思っています。とにかく名古屋大学の学生さんには真似事ではなく研究や診療において新しいものを創り出してほしいです。そのためには失敗や長い年月がかかるのにも耐え開拓精神を持続してほしいです。

(インタビュアー 丹下恵里花 松尾聡一郎)



新院長 に 聞 く

岐阜県立多治見病院

こん どう
近藤

たい ぞう
泰三



岐阜県立多治見病院は東濃可見地域における基幹病院です。病床数 575 床、35 診療科を有し、がん診療連携拠点病院、地域医療支援病院、災害拠点病院、感染症指定医療機関として、さらに東濃可見地域唯一の、救命救急センター、周産期母子医療センターを有し地域医療を提供しています。

診療部門

内科、腎臓内科、血液内科、内分泌内科、リウマチ科、精神科、神経内科、呼吸器内科、消化器内科、循環器内科、小児科、新生児内科、外科、消化器外科、乳 腺・内分泌外科、整形外科、形成外科、脳神経外科、呼吸器外科、心臓外科、血管外科、皮膚科、泌尿器科、産婦人科、眼科、耳鼻いんこう科、リハビリテーション科、放射線治療科、放射線診断科、緩和ケア内科、歯科口腔外科、麻酔科、病理診断科、臨床検査科、救急科

平成 30 年度に病院長に就任された近藤泰三先生にお話を伺いました。

——はじめに、病院長に就任されたお気持ちをお聞かせください。

大きな組織のため、現在の厳しい医療情勢の中で舵取りをして行くのは大変なことですから、責任を実感しています。前院長が経営状態をずっと黒字で維持してきましたので、それを引き継ぐのはプレッシャーに感じていますが、なんとか舵取りして行きたいと思っています。

——県立多治見病院の特徴を教えてください。

この病院は東濃可見地域の三次救急の中心を担っています。この地域では、病院同士が協力し合わない医療が成り立たない状況です。三次救急を担っているのが県立多治見病院だけです。地域の中心病院と言う位置づけがかなり明確です。そのため、全てのメディカルス

タッフが、この病院が最後の砦という矜持をもって取り組んでいます。また、病院としてのメニューがそろっており、三次救急に加え、精神科、NICU、産科領域、結核病棟、感染症病棟、緩和も行っています。全て揃える事で、地域住民の健康増進に貢献しています。

——今後の展望や抱負をお聞かせください。

一番大きなイベントは、四年後に新診療棟が建つことです。新診療棟に手術室や NICU、外来を移転することで効率の良い治療を進めていこうと思っています。また、今年から高性能放射線治療機 True Beam が増えたので、かなり精密な放射線治療ができるようになりました。新しい機器を導入することで、より良い治療を目指していこうと思っています。

——卒後研修への取り組みをお聞かせください。

4 月の 1 週目で BLS と ACLS の講習を行います。また外傷の講習も受けてもらいます。さらに、名大の総合診療から来ていただいて、月に一度総合診療カンファレンスを行っています。3、4 人のチームに分かれて 2 時間みっちりディスカッションをするので、初期研修医の先生にとって非常に勉強になっていると思います。他には、月に一度、診療部長が専門の話をしたり、若手医師が早朝に勉強会を開いたりしています。研修医同士で大学が偏ることもなくバラエティに富んでいるので、様々な文化が混ざり合い仲良くなっていきます。

診療において、first touch は必ず研修医が行います。そのため、半年も経つと遅くなっています。地域医療研修では、奄美の与論島が恵那の上矢作に派遣しています。来年からは沖縄市のちゅうざん病院にも行くことが可能になります。また、当院には精神科があるので、外の病院へ行かずに精神科の研修ができます。診療科が揃っているという点においても、研修しやすい環境だと思います。

——最後に学生へのメッセージをお願いします。

私は学生時代、M2 セミナーで IT 分野に取り組んでいました。実際の医療とは関係のないことを行っていたのですが、その時の経験が名大病院の電子カルテの作成などに役立ちました。将来役に立つかわからないことでも、学生の時代は打算はせずに興味の赴くままに挑戦してみることが大切だと思います。

(インタビュアー：小西 なつの、石井 佐彩)



新診療棟イメージ図 (設計：株式会社共同建築設計事務所)